ヴェーユ感受性研究④

村　上　吉　男

XI

筆者は前号[1]の途中に、ヴェーユの作品《Prologue》を持ち込み、その分析などに多くの余白を割いたことで、それまでの拙論の流れをとぎれさせた感が否めず、ゆえに今回この作品の導入以前に戻り、かかる流れに従って、彼女に窺える宗教（思想）もしくは哲学に対する、筆者なりの持論をさらに展開してみることにする。しかして、筆者が《Prologue》を取り入れたにせよ、そのこと自体筆者にとって、拙論がかかる流れを深めさせようとの思いにこそあれ、徒に挿入を試みたわけでないことは本拙論でも明かされると加えおかねばなるまい。

諸問題の提起のうち、その途中の抜き出しで終わった引用文を再び掲げおくと、それはヴェーユが〈プラトンが神秘主義者であると、『イーリアス』全体がキリスト教の光に包まれていると、ディオニソスとオシリスはある観点からはキリスト御自身であると意識（理解）したのはその後である。そしてわたしの愛は以上によって倍加されたのだ〉と洞察する二文章であった。そのなかで、筆者がいまだ手付かずに残したままの問いは強調文中のそれぞれにあるとみては、まず一として記される〈ある観点からは〉とは何を語るかをみることからはじめる（なお筆者は上記引用文の二つ目の文章の〈以上によって〉と、最初の文章での強調語句〈その後〉とについてはすでに前号で筆者なりの検討や解答を試みたので、ここでは繰返しはしないと断わりおく）。そこで〈ある観点からは〉において、これが〈ディオニソスとオシリス〉を〈キリスト御自身〉にするとみなされるならば、〈ある観点〉が何かを知るは彼女の作品『プラトンにおける神』に窺える、次の引用文が筆者には参考になろう。すなわち、

> Le Dieu de la folie mystique, le dieu des Mystères, Dionysos – qui est le même qu' Osiris, Dieu souffrant, mort et ressuscité...[2]

神秘的な、狂気の神、秘儀（宗教）の神、ディオニソスは―死んで復活した、苦しむ神、オ

シリスと同じ（神）である、と（括弧内は筆者）

筆者は上記引用文に関し、ここに筆者なりに多少知り得ていることを付け加えておく。まず、ギリシアの神である、上記引用文の表記〈ディオニソス（Dionysos)〉または一般的表記の〈ディオニュソス（Dionȳsos)〉は、ゼウスとセメレーの息子であったが、その出生にまつわることでもって、ゼウスの正妻ヘーラーが嫉妬し、ゼウスをそそのかしては、ゼウスがセメレーを焼き殺したことを知るに至る。ディオニソスは発狂し、だからか〈狂気の神〉といわれることにもなろう。一方ことの首謀者ゼウスは一計を案じてか、ディオニソスに世界各地の征服を託した（ディオニソスは、のちにギリシア本土をはじめ、エジプト、中東（シリアなど）やインド（パキスタン）まで遠征した、マケドニアのアレキサンダー（アレクサンドル）大王と同様、この世界各地を支配した）とされるし、その遠征中にか、ディオニソスは女神キュベレーに出会い、彼の〈狂気〉が女神により取り除かれたことで、女神の信仰する〈秘儀（宗教)〉を継承したということである。ディオニソスはまた、オリュムポスの神々の新参者に列せられるにせよ、ときのギリシアをはじめとした「世界」を征服支配せる神に位置づけられるばかりか、これも上記したように、オリュムポスの神々とは異なる宗教であり、その神であったといわねばならない。さらにディオニソスの呼び名には二度に亘り生まれるとの謂があるそうで、そこからは〈死んで復活した、苦しむ神、オシリスと同じ（神）である〉とみられてかまわなくなるのだ。すると次に、エジプトの神、かつ農耕を教示するところの、毎年〈死んで復活した〉植物神、そのうえエジプト王でもあったという、この〈オシリス（Osiris)〉は、兄弟のセトが権謀術数をめぐらしてのことか、これに〈苦しむ神〉ならびに王として世界（エジプト）を統治しつつも、とうとうセトに殺害され、しかも身体までも切り刻まれてしまったとされる。オシリスの妻イーシスは夫のその肉片や骨などをかき集めて埋葬したと、さらにセトに復讐したということである（イーシスが成就させた、この「埋葬」と「復讐」はそれぞれ、筆者には、ヴェーユによる作品《アンチゴネー（Antigone)》の「埋葬」の語りを、また作品《エレクトラ（Électre)》の「復讐」の語りをほうふつさせるだけか、この二作品が書かれた時期（これらが 1936 年 5 月以降に脱稿されたことは、あのポルトガルの漁村で、彼女が正統キリスト教を〈奴隷の宗教〉と見抜いた以降のことに当てはまる）を推察するに、《アンチゴネー》と《エレクトラ》なる各作品は、筆者がこれまでに取り上げてきた問題において、換言すると彼女に「生じたことや試みられていたこと」が何かと提起したうち、ここは「試みられていたこと」が何かに適当する問題において（彼女に「生じたこと」が何かについてはすでに答えおいたし、のちに再度検討する)、彼女が上記した当の二作品以降、このギリシアやエジプトの各神話をはじめとする古代宗教（本文でわずかに触れる、たとえばヴェーダやウパニシャドなど）の文献を調べ研究する先駆けにしていたと、要は正統キリス

ト教はむろんのこと、いわば古代からのあらゆる宗教に関する、博覧強記の姿勢を彼女自らに改めて、あるいは本格的に課したと捉えることができるのだ)。そして、上記した「まず」と「次に」でそれぞれ一見していた通り(ギリシアやエジプトの各神話をはじめとする、上記以上の考察は、つまりこうした古代に関する、詳細を究める研究はその専門家に委ねざるを得なくなる)、おのおのを参考にして、筆者が今ここで〈ある観点からは〉は何を示すかをみるに、彼女をして〈ディオニソスとオシリス〉を〈キリスト御自身である〉といわせたはこの三者に、彼女の引用文に記された、〈死んで復活した〉という語句が共通すると、だからかかる語句が〈ある観点からは〉との〈ある観点〉をいい当てると答えることができる(ただ〈ディオニソス〉の呼び名だけから推し測って、他の二者に共通すると断じるは多少強引すぎる嫌い無きにしも知れぬが)。だがもし人がその語句を適当であると認めぬならば、筆者は〈ディオニソスとオシリス〉が〈キリスト御自身である〉ことに共通した〈ある観点〉を別の語句に見出し得よう。すなわち三者のいずれにも共通する〈ある観点〉をさす、別の語句とは、これも彼女の引用文を用いると、〈同じ(神)である〉との表記のほか、〈この世界〉における、〈苦しむ神〉との表記であり、「王」とのそれであることになる(三者のうち、なかでもキリストは〈神〉に〈見捨てられ〉ただけでなしに、十字架刑ののちに〈復活した〉と触れおいたし、正統キリスト教の世界では「王」に位置づけられているはずである)。その「別の語句」として取り上げたなかで注意すべきは、〈同じ(神)である〉という表記を、要はここでは筆者に括弧内の神の語を含めいわせる表記を〈この世界〉の〈神〉にではなく、〈イデア界〉に住まう〈神〉に宛がうことを意味させるにある。つまり筆者にとっては、上記中のディオニソス、オシリスやキリストは当初〈イデア界〉における各〈神〉であったとみえる一方で、〈この世界〉において、ディオニソスやオシリスと同様、キリストもそれぞれ〈イデア界〉の〈神〉から「王」として世界(各地)の征服と支配(統治)を任せられるために[3]、〈イデア界〉より〈追い出〉されては、この「追放」に〈苦しむ神〉にしかなり得なかったと思わずにおれないわけである。

なかでもキリストに関し、さらに筆者が思うは次のことにある。もし人をして、前号に取り上げた《Prologue》中の語〈I1(彼は)〉を、筆者の述べた〈神〉ではなく、かの「年譜」による「キリストの啓示を受けた」という記載を当てはめ得るとの見方も手伝ってか、〈神の子〉キリストとして受け取らせなければならないと主張させるならば、筆者はこれにどう答えられるかを筆者なりに明らかにする必要があろう(なお何ゆえ、正統キリスト教におけるキリストが持ち出されるか、あるいはヴェーユに窺えるキリスト教におけるキリストになるかに答えることも、本文で多くの引用文を用いたあとでしかなかろう)。《Prologue》の〈I1(彼は)〉はたとえばあの『手紙』にあって、彼女の記すところ、筆者が彼女に〈キリスト御自身が降り、わたしを捕らえた〉とする文章に接しては、なるほど〈I1(彼は)〉をキリストにみなくてはならなくなろう。その辺り

の経緯を語らねばならぬために、以下に多くの引用文が掲げられることになる。すなわち、ソレム修道院での〈10日間〉の滞在（1938年）中、〈わたし（彼女）〉は〈un jeune Anglais catholique qui m'a donné pour la première fois l'idée d'une vertu surnaturelle des sacrements（秘跡の超自然的力の観念をはじめて自分にもたらした、若いカトリックのイギリス人）〉[4]に出会い、彼から〈connaître l' existence de ces poètes anglais du XVIIe siècle qu'on nomme métaphysiques（17世紀イギリスの、いわゆる形而上的詩人たちの存在を知）〉[5]り、〈Plus tard, en les lisant, j'y ai découvert le poème... intitulé Amour（のちにこの詩人たち（の詩）を読むにあって、わたしはそこに…《愛》という題の詩をみつけた）〉[6]し、《愛》の詩を〈(apprendre) par cœur（暗記する）〉[7]だけでなしに、〈au moment culminant des crises violentes de maux de tête（頭痛の発作の最大に激しいときに）〉[8]、この詩を〈réciter（朗誦すること）〉[9]の試みのなかで、〈cette récitation avait la vertu d'une prière（朗誦は祈りの力を有）〉[10]して、〈Le Christ lui-même est descendu et m'a prise（キリスト御自身が降り、わたしを捕えた）〉[11]と記すことにあると。そこで以上から、あの『手紙』に記されよう〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉という文章は、前号で筆者が触れた《Prologue》に語られる内容にかかわってくるか、それとは別かを確かめおくことである。筆者はこれまで、この文章の関係を問うのを除いて、両作品がかかわるように論じてきた。だからこの文章にあっては《Prologue》に関係するのかどうかになろう。その際まず、あの『手紙』と《Prologue》の書かれた時期は前者が1942年5月（15日）の、後者が1942年7月（以降）の同年であり、しかも後者は前者からそれほど遠くない月日を有するのであれば、あの『手紙』の文章もまた《Prologue》（の内容）におよそ無関係でいられぬであろう。二作品はいうまでもなく、宗教に関して共通させられる（ここではまだ宗教をキリスト教（正統や異端も含め）と限定させずにおく。それは彼女が同年にものした、他の作品も、要は筆者の一見しておいた『キリスト教と農耕生活』（1942年春）や『プラトンにおける神』（1942年11月）も宗教に関係すると思えるからである。同年（1942年）に宗教に関し書き上げたであろう諸作品を順にまとめ直すと、おのおのは『キリスト教と農耕生活』（春）から、『ペラン神父への手紙（これを「あの『手紙』と表記した）』（5月）、次いで《Prologue》（7月）そして『プラトンにおける神』（11月）の、都合四作品であり、それぞれいまだ考察途中である）。上記した諸作品のうち、今問うあの『手紙』と《Prologue》とがかかわるとみて、どう関係するかを推測するは以下の通りである。あの『手紙』に記される1938年のソレム修道院での〈10日間〉の滞在において、彼女に〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉といわせることが《Prologue》の語ることに当てはめ得るならば、筆者は前者（手紙）でいう〈キリスト御自身が降り〉云々を〈10日間〉中の、後者でいう〈ある日〉以前の日か、あるいは〈ある日〉当日か、〈ある日〉以降になるか定かにできないにしろ、筆者がすでに《Prologue》で質

していたごとく、これは彼女が「四日間」に亘り、その都度キリストといわさずに、〈神〉とし、〈神〉に出会ったとする内容で組立てられた作品になろうと断じて過言でなくなる（筆者に今〈神〉と何ゆえ書かせたかはのちに取り上げる、彼女の引用文で証明を試みると、また「四日間」とはあの『手紙』にいう、ポルトガルの漁村（一日目）、アシジ（二日目）とソレム（三日目）ならびにソレムでの〈ある日〉（の当日かその前後）の各出来事（現象）に対応させられた日をさすといえども、たとえば本文に前記し後述もするように、「一日目」から「三日目」のそれぞれが〈神〉と出会う、次の日を迎えられるまでに、彼女（の〈魂〉）が〈イデア界〉より〈この世界〉に立ち戻っていたかを読み取ることは不可能であるといわなければならない）、以上を念頭に入れつつ、ここは上記した引用文や語（句）のなかで、さらに記憶すべきことが問われる。それはまず、〈l'idée（観念）〉〈une vertu surnaturelle（超自然的力）〉や〈la vertu d'une prière（祈りの力）〉である。筆者のみるところ、〈l'idée〉は〈イデア〉とそのまま換言させてかまわぬし、かの〈イデア〉の世界（イデア界）という「あの世界」を示すことはまた、そこに記された〈surnaturelle〉を用いて〈超自然的〉世界とする表記に等しくさせるだけでなく、〈vertu（力）〉の働く世界であるといえた（〈力〉に不定冠詞と定冠詞が使用されるはそれぞれ、〈超自然的〉一を、いわば〈祈り〉用の限定を当然さすことになる）。したがって〈une prière〉も彼女にとって〈イデア界〉での一〈祈り〉にみなされていた。次に、筆者が「記憶すべき」と書いた「記憶」のことでいえば、〈(apprendre) par cœur（暗記する）〉さえ、この能力に組み込まれようが、しかし一方〈réciter（朗誦する）〉や〈récitation（朗誦）〉は「記憶」能力の与する〈理性（知性）〉の作用によるのではなしに、「大声を出す」謂であるかぎり、身体（喉や口の発声器官など）を「動かす」ところの能力が、要は筆者にいう〈感じる（ressentir）〉とその〈感受性（sensibilité）〉が「大声を出す」際の基となることによってもたらされると、さらに、彼女が〈pour la première fois〉と記述したは、その〈はじめて〉なのが〈秘跡〉にかかかわることをたんにさし示すにとどまるのであり、だから彼女が〈秘跡の超自然的力の観念（イデア）〉を獲得できるとされても、それ以外のことではないと、何しろ〈観念〉もしくは〈イデア〉はそれ自体、疾うに一見し、また後記もするが、〈理性（知性）〉の作用で生み出されたにすぎないと、そして、〈Plus tard（のちに）〉は例のソレム修道院での〈10 日間〉のなかに含まれる、〈のちに〉という日なのか、それともこの日々以外での日かには彼女の言が明確でないために答えられないと知るほかない。

さて前段での一括弧内に記したところの、ヴェーユが 1942 年宗教に関して書き上げたとされるなかから、筆者のその選択でしかない計四作品に対し（同年には四作品のほか、宗教に関する、多くの作品が見受けられる）、わけてもあの『手紙』と《Proloque》に対し、それらはどれ一つ関係することがないと人に指摘されるならば、彼女はたとえば宗教に関することでさえ、宗教が

〈この世界〉の問題として扱われるだけに終止させずに、上記した引用文中に散見した〈surnaturelle（超自然的）〉や〈métaphysique（形而上的）〉たる各語（形容詞）を四作品に、あるいはここでみる二作品に盛り込められねばならぬことを理解させる必要があろう（《Prologue》では〈Il（彼は）〉と書かれたにすぎないが、それでも彼女はこの作品に〈Il（彼は）〉をイエス・キリストとも明記することがなかった。だから筆者は取り敢えず、〈Il（彼は）〉が〈イデア界〉の〈神〉をさすとみることもできたわけである。しかして彼女はかかる〈神の問題〉よりか、確か〈この世界〉に生じるすべての出来事（現象）をば問題にしなければならぬといいながら、そこから彼女自らに辿りつかせた答えを筆者なりの言で引き出す際、彼女が「〈この世界〉の問題は〈神の問題〉を解決させずして解けない」ごとくに語ったところに見出せるといえる以上、筆者はこの言を再度確認しておく必要がある）。彼女にとって、すべての出来事（現象）がそれ自体を〈この世界〉だけに関係させることで済ませられると、例の〈超自然的〉ばかりか、〈形而上的〉各語が作品に記されるなどは不必要になろう。要するに〈超自然的〉や〈形而上的〉で意図されたとみえるは〈神〉のことであり、〈神〉は〈超自然的〉なる〈イデア界〉に住まい、〈この世界〉には〈不在〉しているということである。それでは彼女は他方で指摘できるイエス・キリストをどうみていたのかを以下に掲げる、彼女の引用文に従って、筆者なりに答えおくことにしよう。

Je n'avais pas prévu la possibilité..., d'un contact réel, de personne à personne, ici-bas, entre un être humain et Dieu.... Dans cette soudaine emprise du Christ sur moi,... j'ai seulement senti à travers la souffrance la présence d'un amour analogue à celui qu'on lit dans le sourire d'un visage aimé....

Je ne me demandais jamais si Jésus a été ou non une incarnation de Dieu; mais en fait j'étais incapable de penser à lui sans le penser comme Dieu.[12]（傍線（省略）部分は筆者）

わたしはこの世界で、人間と神との間での、人格から人格への、現実的接触の…機会を予測しなかった。…キリストが突然わたしを捕えることにあって、…わたしはただ苦しみ（不幸）を通して愛する人の顔の微笑に読まれるものに似た愛の気配を感じただけでした。

わたしはイエスが神の受肉（托身）であったかどうかを一度も自問することはなかった。しかし事実はわたしがイエスを神として思惟することなしに、イエスのことを思惟できなかった。（括弧内は筆者）

上記二段落に亘る引用文は誰しも〈ici-bas（この世界）〉に関する内容にほかならないと認め

るに異存なかろう。それは筆者のみるところ、以下の問いを掲げることで証明されるにちがいない。すなわち、〈この世界〉のことは筆者にいかなる語（句）で明らかにさせ得るかを、かつこの取り出された語（句）から、筆者はヴェーユが〈この世界〉のことだけを、それとも〈この世界〉以外のことをも語るのかを見定めることにあると。そこで筆者は何にしても、この語（句）を取り入れて筆者なりにみる、引用文の要旨を述べ、そのうえでかかる問いに答えおくことにする。要旨は引用文を繰返すかにみえども、問いへの語（句）を明示するためであり、次のようになろう。彼女が〈人間（わたし）〉の人格〉から〈神（イエス）〉の〈人格〉への、〈現実的接触の…機会を予測しなかった〉と記したにもかかわらず、〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉は、〈わたしは苦しみ（不幸）を通して…愛の気配を感じた〉とは、また引用文の二段落目で、〈わたしはイエスが神の受肉（托身）であったかどうかを一度も自問する〉ことをせずとも、〈イエスを神として思惟する〉とは筆者のまとめである。上記した要旨（まとめ）の順に従わせ、筆者が〈この世界〉のことをさし示す語（句）を拾ってみるならば、それらは〈人格〉〈現実的接触〉〈キリスト〉〈苦しみ（不幸）を通して〉〈愛の気配を感じた〉〈受肉（托身）〉や〈イエスを神として思惟する〉になろう。ここからこれらの語（句）を順不同で最低一度使用することにし、筆者は以下に記す点を確認しておかねばならない。すなわち一に、神の子〈キリスト〉が〈この世界〉に〈イエス〉たる〈人格〉であらわれたという〈受肉（托身）〉を、かつ彼女（人間）がかかる〈人格〉との〈現実的接触〉（の機会）をそれぞれ〈自問〉〈予測〉しなかったことは、換言すると彼女がかのデカルトに〈自問（する）〉や〈予測（する）〉の各否定的動詞を含ませていわせる〈思惟（する）〉を試さなかったことは、しかして一方で〈イエスを神として、思惟する〉と述べた際の〈思惟する（penser）〉ことは彼女にとって、〈この世界〉だけに通用しよう語（句）にさせられるほかなかったからであると。このことは同時に、〈感じる（sentir）〉に対してもいえることでなければならない。すなわち一に、「〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉は」、〈苦しみ（不幸）を通して〉受ける〈愛の気配を感じた〉と彼女に記されたなかでの〈感じる〉もまた〈思惟する〉と同様に、彼女にいう〈（自然的）魂（l'âme）〉の〈自然的〉〈感じる〉たる〈能動〉とその〈感受性〉たる〈受動〉の（各）能力だからであった（ちなみに〈思惟（する）〉とした表記においては、〈思惟する〉〈能動〉とその〈思惟〉たる〈受動〉の（各）能力をさすし、〈思惟する〉〈能動〉と〈思惟〉〈受動〉が彼女にデカルトと同じく〈同一である〉とみなされるとき、括弧内の語「各」は取り除かれることになる）と。そして一に、筆者が上記した〈思惟する〉や〈感じる〉について、ここに〈思惟する〉ことよりか〈感じる〉ことに拘るのは、〈感じる〉が前記の、三つの語句に、つまり「〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉は〈苦しみ（不幸）を通して〉受ける〈愛の気配を感じた〉それぞれ（の語句）に関係させられる語でなければならないからである。わけても三つの語句の一つ〈苦しみを通して〉に対し、

〈感じる〉は〈苦しみ〉を受苦させる能力でしかなくなる。こうした〈苦しみ〉の語に加え、筆者が〈不幸〉の語を括弧にしたは〈不幸を通して神の愛を愛する可能性〉という既出語句の〈不幸〉を〈苦しみ〉に代えたことにすぎないと、したがって同語句の謂たる〈苦しみ（不幸）を通して〉は筆者に、彼女をしてときに〈頭痛のうちに〉、ときに〈朗誦のときに〉と記させるに等しい表記になり得るとみえてくる。だが〈苦しみ（不幸）を通して〉、また〈頭痛のうちに〉、そして〈朗誦のときに〉受苦できる能力〈感じる〉は何に向けられるのか、たとえば〈この世界〉における〈世界の美〉や〈不幸〉なる各出来事（現象）になのか。それもあるやも知れぬが、それだけでなかろう。こうした〈感じる〉は彼女（人間）自身の生み出し得る能力であるはむろんのこと、上記した諸対象（例の〈世界の美〉や〈この世界〉での〈不幸〉）に対することにもかかわらず、ここでは彼女自らを対象にさせるほかなくなるのだ。そのうえ「彼女自ら」のことをも含めていう諸対象に発揮できる〈感じる〉は、〈わたし〉が〈キリスト〉に〈捕え〉られるためには（これは新たな章で問う）、筆者に〈苦しみ（不幸）を通して〉と同意にみえた〈頭痛のうちに〉や〈朗誦のときに〉をもかかる（〈わたし〉が〈キリスト〉に〈捕え〉られる）条件とせずにおれない能力になる。とまれ〈苦しみ（不幸）を通して〉〈頭痛のうちに〉や〈朗誦のときに〉という語句にあって、前記したごとき「〈苦しみを通して〉受ける〈愛の気配を感じた〉ならびに〈不幸を通して神の愛を愛する〉」と書かれた各語句中の〈感じる〉や〈愛する〉は〈（自然的）魂（l'âme）〉の一部位〈魂（une âme）〉の働きによるとみられていたことに比べ、他方の〈頭痛のうちに〉や〈朗誦のときに〉は、筆者に各伴なわれるとみる〈感じる〉が当初より、〈魂（l'âme）〉でなしに、身体（諸器官）の働きで生じるところに関係し、しかもその〈感じる〉は〈魂（une âme）〉の〈能動〉能力〈sentir〉とは相違して、身体の能力とみなされた〈能動〉能力〈ressentir〉でなければならなかった。彼女にとって、〈頭痛〉はある意味人間（彼女）の身体（脳）自体の、要は自己とされる〈魂（l'âme）〉自身の〈苦しみ（不幸）〉をあらわすに相当しようし、また〈形而上的詩人〉といわれた George・HERBERT（ジョージ・ハーバート）（1593 年－1633 年）の《Love（愛）》の詩を声に出して読む（唱える）〈朗誦〉は当然声帯（喉）を使うことでは発声器官たる身体に関与させられざるを得なくなる。この〈頭痛〉も〈朗誦〉も彼女をしてまずは身体の各〈感じる（ressentir）〉能力とかかわらせもたらされるといい得よう（身体と彼女という〈魂（l'âme）〉との繋がりについては後述に譲る）が、しかしそもそも〈魂（une âme）〉の能力〈感じる（sentir）〉とのばかりか、かかる身体の能力〈感じる（ressentir）〉との正体は何かと質したにあって、筆者はこうした〈感じる（sentir や ressentir）〉がそれぞれ〈魂（une âme）〉や身体の〈運動（動き）〉すなわち〈行動〉であると、換言すると彼女において、人間（彼女）の〈運動（動き）〉〈行動〉そのものをあらわす能力が〈魂（une âme）〉や身体の各〈感じる（sentir や ressentir）〉であると、しかもこの各〈能動〉能力で生み出される各〈受動〉

能力が〈感受性〉であるとみることができたわけである。だが身体の能力〈感じる（ressentir)〉とその〈感受性〉がたとえば〈頭痛〉や〈朗誦〉に対して、前者（頭痛）をして〈苦しみ（不幸)〉や〈激しい〉と、《愛》の詩の後者（朗誦）をして詩の〈美しさ〉や〈やさしさ〉と〈感情〉移入させる表現を引き出し、かかる語句や文章を作らせ得るは不可能なのである。だから〈感情〉表現を打ち出したくば、身体の〈受動〉能力〈感受性〉が〈魂（l'âme)〉に伝達されなければならないだけか、さらに〈魂（l'âme)〉中の一部位〈魂（une âme)〉(〈魂（une âme)〉はまた〈感情〉も生じさせた）を経由し、〈魂（l'âme)〉のもうひとつの部位〈精神（un esprit)〉に届き、その作用に委ねられる必要があったのだ。このことは〈精神（un esprit)〉の部位のことを除けば、察するに、身体の〈感受性〉がそのまま〈魂（une âme)〉に伝わって、これを受け入れた〈魂（une âme)〉が〈運動（行動)〉を越こしはじめる場合に相当するとみてかまわぬから、その〈能動〉能力〈ressentir（再び感じる)〉が働いて、〈魂（une âme)〉としての〈感受性〉がもたらされたといい得る一方、身体の〈感受性〉の〈魂（une âme)〉への伝達に関し、そこに即時でなく、時間的経過がみられて働きかけるならば、あるいは身体の〈感受性〉に関係なく、〈魂（une âme)〉自身が独自にその対象として働きかけるならば、この〈能動〉能力はいずれも〈sentir（感じる)〉であるし、その各〈受動〉能力〈感受性〉が産出されずにいないであろうといわねばならない。

XII

筆者が前章の後半箇所で取り上げおいた「〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉は、〈わたしは苦しみ（不幸）を通して、…愛の気配を感じた〉」とまとめた引用文のうち、すでに一見した〈苦しみ（不幸）を通して〉(あるいは〈頭痛のうちに〉や〈朗誦のときに〉)の（各）語句を除いて、そこに記された、残りの語句について、筆者は改めて問うてみなければなるまい（二段落目の〈イエスを神として思惟する〉という語句をその問いに掲げたことも同様である)。筆者が上記の括弧に付した、筆者のまとめによる引用文をここに再度持ち出したは、この引用文の各語句のなかで、わけても〈Dans cette soudaine emprise du Christ sur moi〉を〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉と訳した語句を取り出し、かかる訳出中の〈わたし〉をして、筆者にいう「〈この世界〉のことに関して」に関係させ得るかどうかを確かめるためである（引用文に散見する、当の上記語句をはじめ、他の語句ものちの本文で順次明かされるし、もとより「〈この世界〉のことに関して」に関係させられるとみておく)。だが筆者がすでに「〈この世界〉のことに関して」生じた出来事（現象）の一を〈キリストが突然わたしを捕えること〉にあると指摘していたかぎり、もはや確かめるまでもないのだ。もし確認が必要とされるならば、ここは

他を例にして、〈この世界〉と関係する出来事（現象）の一を明らかにさせねばならぬであろう。「他」の例はかの「年譜」に記載された事項である。すなわちこの事項とは彼女が 1938 年 3 月に「はげしい頭痛のうちにキリストの啓示を受ける」ことをさすと。かかる表記のなかで、「はげしい頭痛のうちに」での「頭痛」は彼女に生じていたのだから、当然〈この世界〉の一出来事（現象）に加えられると、また「キリストの啓示」での「啓示（Révélation)」は疾うに触れたことで分かる通り、神が〈神の子〉キリストを含めて、人間（もっぱらキリスト者）たちに、人知の及ばぬことを諭し示す謂であるのだから、「人知の及ばぬこと」が「人知」たる〈この世界〉に（果たしてみられるかはさておき）証されるといえるわけである。しかし筆者が思うに、彼女は〈この世界〉で真に「キリストの啓示を受け」ていたのか。彼女はキリスト者ではないだけか、当の上記引用語句（原文）周辺に、彼女が自ら「啓示」と書き記すこともなかった。そこで事前に問うておくべきは、「年譜」編集者がこの事項の出所をどこに求め、何をもって彼女が「キリストの啓示を受ける」と記載したかである。筆者が推し測るに、まず「どこに」はすでに一見していた、あの《手紙》をさすほか、その〈En 1938（1938 年)〉ではじまる段落こそ、「年譜」年号に符合させないかと。そして「何をもって」に応じるは筆者にいう、例の上記引用語句（原文)、すなわちこの訳たる〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉であり、これが「年譜」の〈キリストの啓示を受ける〉に当てはまりはしないかと。かつその上記引用語句（原文）は実は〈En 1938〉と記された段落から数えて三段落目のなかに見出されくると。

ところで、〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉と訳出した、例の上記引用語句に対して、ヴェーユが〈わたしを捕えた〉という記述を含ませた文章を、前段で指摘した〈En 1938〉の段落に続く段落の、要は〈1938 年〉からみると二段落目の最終行に書いていたのに気づかれるであろうか。その文章とは〈Le Christ lui-même est descendu et m'a prise〉であった。上記した引用語句と文章に共通して見出される〈わたしを捕える（捕えた)〉という訳をここに列挙するは、二つの訳が時制のことを抜きにしても、筆者にとって、さらなる問題として質されねばならぬことを前以て知ってもらうためである。筆者は上記引用語句と文章から生じてこよう問題にあって、たとえば〈わたしを捕える（捕えた)〉その各内容の背景を等しいと捉えてはいないのだが、それでも今即座にいかなる異同がおのおのに見受けられるかに答えるよりか、このそれぞれがあの「年譜」に記載される、例の「啓示」（の謂）に似つかわしい表現か否かへの答えを先きにみずして、「年譜」の「啓示」を含めた記載事項を信用し認めることすらできなくなる。なぜかは「年譜」記載事項を検証したうえでしか、かかる事項が〈わたしを捕える（捕えた)〉にふさわしいか、はたまた〈わたしを捕える（捕えた)〉が各何を語るか明確にされてはこないからである。このことは「年譜」記載事項と〈わたしを捕える（捕えた)〉が何よりもまず比べられることを示唆させる。その場合、比較ができるだけ同じ条件のもとで成るとみるならば、「年

譜」記載事項にさらに、「はげしい頭痛のうちに」との語句が「キリストの啓示を受ける」に修飾される以上、筆者はこうした類の修飾語句が〈わたしを捕える（捕えた）〉を含む一文章内に、つまり引用語句か文章のいずれかの一文章に収まるかを確かめおく必要があろう。「一文章内に収まる」という条件下では、前者の引用語句がでなしに、当然、後者の文章の方がこの比較の対象に選択されよう。しかし筆者が《愛》の詩について語った原文（文章）周辺に従うと、彼女はこの原文（文章）に、「年譜」の記載のごとき語句「はげしい頭痛のうち」を修飾させるのではなく、〈au cours d'une de ces récitations（朗誦のときに）〉の語句を書き加えるのだ。これはどういうことか。「年譜」編集者の錯誤によるのか。それとも〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えたは、…朗誦のときにであった〉ことが「啓示」（の謂）にそぐわないとみえては、筆者は「啓示」（の謂）に適当する、他の箇所をかかる原文に、あるいはこの《手紙》以外の作品に探し出すべきか。たとえば《Prologue》たる作品では、〈I1〉（ここは〈彼は〉とだけ記しおく）は〈わたし（彼女）〉を教え導くことをもって、「諭し示す」に、要は「啓示」（の謂）に宛がわれるかが、もしくは〈わたし（彼女）〉を〈彼〉に出会わすかが描かれたと筆者に思えるが、しかし当の作品は 1942 年の成立であり、「年譜」に記載される年のことではなかった。しかも「啓示」（の謂）に当てはまる箇所を原文に求めてみたところで、〈En 1938〉ではじまる段落の、〈わたしを捕えた〉と記される二段落目の、そして〈わたしを捕えることにあって〉と書かれる三段落目のそれぞれに「啓示」（の謂）に見合う箇所を、または「啓示」の語を見出すことができないはむろんのこと、1938 年以外に窺える「啓示」は「年譜」記載事項に反することにもなろう。筆者は以上をして「年譜」記載事項を信用し認めさせるに否と答えるほかなかったわけである。さすれば「啓示」とはそもそも何であったかであろう。繰返すが、「年譜」に「キリストの啓示を受ける」と書かれていたならば、筆者はキリスト自らを彼女に「諭し示す」謂でしかないと受け取らねばならなくなろう。すると上記のように問うてきただけでなく、そのうえ筆者が取り上げた、例の三つの段落に関するなかに、「啓示」の語をはじめ、「啓示」について語る、いかなる語句や文章にさえ出くわすことがないとみえるかぎり、何度も記してきた、〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉という文章こそ「啓示」（の謂）に合致させられると指摘せねばならなくなるのではなかろうか。そして筆者にすれば、前記した文章に、「年譜」では「はげしい頭痛のうちに」（この記載事項を《手紙》での上記三段落中に取り出しいえば、一段落目の語句〈des maux de tête intenses〉あるいは二段落目の語句〈au moment culminant des crises violentes de maux de tête〉になろう）が、同じく《手紙》では二段落目の語句〈朗誦のときに〉が、さらに《手紙》一段落目の語句〈不幸を通して（à travers le malheur）〉かつ三段落目の語句〈苦しみを通して（à travers la souffrance）〉がかりに各修飾したとて、筆者はこの修飾語句のどれもが「前記した文章」にかかわり得ることを否定はしないし、人をしてその異同にめくじらを立てさせ、何々の語

句以外認められないと執着させるほどの問題にもなり得なくなるであろう（なぜかは後述に譲るほかない）。

だが以上のようにみたのでは、人は筆者が1938年の「年譜」記載事項を信用しない認めないとまで述べる必要があるかと訝るにちがいない。すなわち筆者が「年譜」記載事項に関する冗漫な説明を試みずに、ことのはじめから、彼女は「はげしい頭痛のうちにキリストの啓示を受ける」ことを肯定すべきであったと。そういえるやも知れない。されど筆者がこうした「啓示」のことを容認できないと断じたのには、そこに別の理由がみられくるからである。人はそのとき、かかる理由をどう判じるかなのであり、この判断にとっては、何度も記し得た〈わたしを捕えた〉ことがかかわるか否かを見定めなければならぬことを念頭に置く必要がある。だがここで、「年譜」に記載された「啓示」が何かとは疾うに一見しておいたと同時に、今また筆者はこの「啓示」こそ彼女にいう〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉謂であるごとくに指摘したことを振り返るに、果たして「啓示」が〈わたしを捕えた〉とされるに等しいのか。たとえば「キリスト者」が「年譜」にいう「キリストの啓示を受ける」といえた場合に、筆者にあっては、「啓示」なる出来事（現象）が惹起し、かの〈理性（知性）〉がその出来事（現象）をば「啓示」と名付けたにしても、出来事（現象）の方が彼女の主張を持ち出すまでもなく、〈理性（知性）〉の活用でもたらされるあの命名以前に現出すると思えるのであり、しかも当の「啓示」が現出する場はいわずと知れたこと、〈この世界〉でしかないのだ。それゆえ、筆者が先きに「「啓示」のことを容認できないと断じたのには別の理由がみられくるから」と記した際の、「別の理由」も「啓示」が〈この世界〉で生じた出来事（現象）であるかぎり、当然〈この世界〉に現出される以外に求められてはならないと、しかも「啓示」はむろんのこと、ヴェーユを除いていう誰もが、その一人筆者が何度も述べてきた「出来事」や「現象」さえ、〈この世界〉でしか活用され得ない〈理性（知性）〉に依存し生み出される諸語にほかならなくなると。さらにいうと、これまで触れおいたなかの〈頭痛〉〈朗誦〉や〈苦しみ（不幸）〉もそれぞれ出来事（現象）であり、諸語の一であるは上記したことと同様なのである。そこから筆者は、彼女自らがあの〈霊的自叙伝〉とみなす『手紙』に「啓示」の語を書き入れはしなかったとみた以上、「啓示」に符合すると指摘した〈わたしを捕えた〉はもともと「啓示」に関係させることができない、換言すると〈わたしを捕えた〉は筆者が「啓示」の謂に等しいと述べてきたにしても、ここにいう〈この世界〉での出来事（現象）に受け取られるかを判じるならば（後段）、〈わたしを捕えた〉を「啓示」にかかわらせるはもはや無理であると結語するほかないにちがいない。

こうした「判じる」を証しする一は、たとえば筆者があの『手紙』で彼女をして（正統）キリスト教を言及せしめる、〈En 1937〉と書かれた段落以降中の諸引用文を適宜持ち出し掲げたとみるなかで、彼女が（正統）キリスト教に関し批評する諸段落の流れに逆らわせてか、突如プラ

トン、『イーリアス』、ディオニソスやオシリスについて語る段落を挿入させていた、当の引用文に見出される（筆者は疾うにディオニソスやオシリスを一見したが、いまだ『イーリアス』とプラトンに関し詳しくは触れずにいる）。そこでプラトンなどと記された引用文のほか、適当な引用文を彼女の諸作品から拾い出し、このさらなる証明を試みる必要があるといえども、これに今すぐ取り掛かるのではなく、その前にそうみえるはどうしてなのかという、筆者なりの見方が語られねばなるまい。それは何度となく掲げる、〈キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉一文を〈この世界〉で起きた出来事（現象）として捉えてはならないことにあったのだ。キリストがキリスト者でなかった彼女を、要は〈わたしを捕えた〉は「〈この世界〉以外のこと」すなわち〈イデア界〉においてであった。このキリストが、または彼女の既出引用文に記されるイエスが〈神の受肉（托身）〉であるとみられるは、〈神の子〉たるキリストがイエスという〈人格〉を取って〈この世界〉にあらわれたごとくにいわれども、さらに続けて、彼女が〈イエスを神として思惟することなしに、イエスのことを思惟できなかった〉と語るならば（〈思惟する〉については後述に譲る）、筆者はキリストを〈この世界〉での人間（人格）だけにとどまらせみてはならないであろうと、とどのつまり彼女にとって〈イエスを神として思惟〉せずにおれないかぎり、イエスすなわちキリストを〈イデア界〉にさえ関係させておかねばなかろう。そこで〈この世界〉でイエスはどう生かされたかに筆者なりに答えるにあって、これも筆者なりに指摘した、〈イデア界〉に居ました〈神の子〉キリストが〈この世界〉に「追放」されたという見方が、要はキリスト（イエス）のみか、彼女をはじめ、〈わたしたち〉人間もまた、神から〈見捨て〉られたという見方が踏まえられていなければなるまい。そして〈イデア界〉に関連させるには〈わたしたち〉が「神から「追放」され〈見捨て〉られた」ことを嘆き悲しむか、そこから救われるべく、キリスト（イエス）（の十字架）に見倣い縋るかするのでなしに、「自力」で何かをしなければならぬのであり、それをここでは一見したこととはいえ、〈この世界〉で彼女に生じた出来事（現象）にかかわらせ、もう一度簡単に振り返り確かめおくことにしたい。「彼女に生じた出来事（現象）」とは、「年譜」記載での、彼女自らを襲った「はげしい頭痛のうちに」中の「頭痛」であり、同様に〈朗誦のときに〉中の〈朗誦〉や、彼女自らのばかりか、〈この世界〉に蔓延する〈苦しみ（不幸）を通して〉という表記中の各〈苦しみ（不幸）〉であって、このそれぞれこそが彼女を上記にいう〈イデア界〉に導く与件となった。それは彼女の場合、そのおのおのを現出させずにいない、自らの身体の〈運動（行動）〉なしに、不断（日常）の身体の「動き」からくる〈量〉にとどまらない、各〈運動量〉がもたらされないどころか、かかる〈量〉を負うと知らず知らずのうちに、彼女の〈（自然的）魂（l'âme）〉を構成する、その一部位〈魂（une âme）〉に伝わりはしないし、そこからさらにその他の部位〈精神（un esprit）〉で作用したる〈思惟〉をときに〈逃亡〉（作用不可能に）させ、もってこの〈（自然的）魂（l'âme）〉全体を〈空無（真空）（vide）〉に誘

いはしないからであった（ここは彼女にあって、〈(自然的) 魂 (l'âme)〉の、要は〈脳〉の構造上、身体での上記した各〈運動量〉すなわち身体での各〈感受性 (sensibilité)〉の〈量〉が何より先きに〈魂 (une âme)〉に、次に〈精神 (un esprit)〉に伝達されるとみられるのが一般的（順序）であり、したがって彼女（わたし）をはじめとする〈わたしたち〉人間の生き方にとって、この身体と〈魂 (l'âme)〉との関係を記す例にすぎない。だがそう述べたことで、筆者には〈魂 (l'âme)〉と〈わたし〉が、あるいは〈脳〉と〈わたし〉が同一に受け取られ得るかどうかという新たな課題として課せられる。これも後述に譲らねばなるまい)。

とまれ前段に「各出来事（現象)」と表記したなかで、〈朗誦〉のことは後記した〈受難〉に無関係でないとみても、ここでは別にして、とりわけあの「頭痛」や〈苦しみ（不幸)〉のことは筆者において、〈受難〉に与させ捉えられるにちがいない。〈受難〉は周知のごとく、神がキリストを〈この世界〉に遣わし（筆者にすれば「追放」し)、キリスト（イエス）に多大な苦難（受難）（筆者からすると「追放」も苦難（受難）の一だ）を味わわせることをだけでなく、〈Dieu prouve son amour envers nous: lorsque nous étions encore pécheurs, Christ est mort pour nous（(わたしたちが）まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったこと（受難）によって、神はわたしたちに対する愛を示された)〉[13]ことを含意させるにある。筆者が以上を踏まえ、筆者なりにまとめるに、一に、「頭痛」は彼女にとって、〈苦しみ（不幸)〉に価する一であるし、そうみられるならば、〈受難〉に等しくなろうと。要するに、「頭痛」は〈(自然的) 魂 (l'âme)〉中の一部位〈魂 (une âme)〉の不断（日常）の〈感じる〉働きを越えて得られた、より〈量〉的な能力〈感受性〉を生み出させるばかりか、そこから影響を受けずにおれない、他の部位〈精神 (un esprit)〉での作用でもたらされる能力〈思惟〉をも〈逃亡〉させる一因をかたちづくるだけか、彼女（人間）に欠かしてならぬ、この〈思惟〉が〈逃亡〉するほどの出来事（現象）によっては、〈魂 (l'âme)〉すなわち〈脳〉をして彼女（わたし）自らの、〈思惟〉の機能を機能不全に、つまりはかの痛みたる、〈苦しみ（不幸)〉の一に陥らせるかぎり、「頭痛」すら彼女（わたし）の意志通りになり得ないことでは、その苦難を招くことに、つまりは〈受難〉を受けることに変わりがないと断じてかまわないのだ（ここでも、「〈魂〉や〈脳〉がそれぞれ〈わたし〉と同一であるか」否か（の関係）を問うのではないと付け加えざるを得ない。なるほど〈魂〉や〈脳〉はおのおのが自ら一例にした「頭痛」あるいは〈苦しみ（不幸)〉とはいわぬのだから、〈わたし〉がそういうほかないにしろ、〈わたし〉は〈魂〉や〈脳〉といかに関係するかを質すことになろう)。一に、筆者が思うに、上記の、それ自身がたがいに相違しよう、「頭痛」や〈苦しみ（不幸)〉の各（邦）語はむろんのこと、これら以外に、〈神の子〉キリストが〈この世界〉に「追放」されたとみる「追放」の、またそのキリストの〈死〉の、さらに〈わたしたちがまだ罪人であった時〉という、〈わたしたち〉の〈罪〉のそれぞれはすべて、例の〈受難〉の語に代

表させ得る、この語意に包括せしめられるだけでなく、かかる〈受難〉こそ〈神はわたしたちに対する愛を示された〉といわせる〈神の愛（アガペー）〉であるにちがいないのだと。さすれば〈受難〉すなわち〈神の愛〉が振りかかるのが〈この世界〉の正体であるは、それをして彼女を含めた〈わたしたち〉を永遠に逃れさせはしない、〈わたしたち〉の運命たらしめることを、換言するとこのことは〈この世界〉が彼女にいう〈痛ましく愛されている〉ところに起因することを証すであろう。だから〈この世界〉が〈痛ましく愛されている〉ことは〈わたしたち〉にとって、これもまた彼女に、〈不幸〉や〈世界の美〉の因たる〈必然性（nécessité）〉を背負い生きるほかないと断じさせたに等しくなるわけである。だが一に、あの正統キリスト教（の教え）において、上記した〈わたしたちがまだ罪人であった時〉と述べられたなかでの〈罪人〉とはイエス・キリスト生誕以前の、たとえば『創世記』中の〈男と女〉(14)なる人間に対し、神より原罪が与えられ、周知のように、終生〈男（かのアダムなど）〉は労働に従事し、〈女（かのイヴなど）〉は産みの苦しみに出会すことで、「（原）罪」を担わされたことをさすにちがいない。かつこれに加え、またはこれに反してか、イエス・キリスト生誕後、彼は〈わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか〉と悩み続けた、この〈苦しみ（不幸）〉をついもらすばかりか、さらに十字架上での〈死〉に追いやられるは、イエス・キリストの〈死〉から今日にかけて、しかし〈わたしたち〉は〈この世界〉で生きているイエス・キリストに出会うわけではないのに、現在の〈わたしたち〉から依然として消え去りはしない「（原）罪」を、あるいは生涯に遭遇しよう、数知れない〈受難〉を〈わたしたちのために〉受苦され引き受けられることにあったとイエスなる他人ごとで済ますならば、〈わたしたち〉の〈（原）罪〉や〈受難〉のすべてはイエスに押し付けてかまわぬとみなされ、〈わたしたち〉の前から無くなってしまうであろう。〈この世界〉に〈わたしたち〉の〈罪〉や〈受難〉のかけらすらも無いとされるはヴェーユにとって、彼女にいう〈矛盾〉の意にはほど遠くなるにしろ、それでも一種の〈矛盾〉を示すに間違いなかろう。だから〈わたしたち〉はイエス・キリスト（の十字架）を通した信仰にとどまるのでは、「自力」で自らの「罪」や〈受難〉を、すなわち自らをはじめ、イエス・キリストも味わいつくした〈苦しみ（不幸）を通して〉、神により創造されたといわれる〈この世界〉を（後段にて主に語ろう）彼女の造語である〈décréation（逆創造）〉を試みつつ、筆者に強調される〈イデア界〉に達し、〈イデア界〉にて〈神〉や〈神の子〉との出会いを現実にさせはしなくなる。

XIII

さて前節に残した問いとなる、かの〈霊的自叙伝〉と呼ばれた『手紙』における〈わたしを捕えた〉あるいは〈わたしを捕える〉と各記されたことに関し、そのおのおのを検討するうえで、

これまで筆者は筆者なりに取り上げてきた語句〈En 1938〉ではじまる段落を以下に掲げる段落にも関連するとの理由から、第一段落目と見立てることにしたほか、次の段落（第二段落目）では、その最終行に、再度記すが、上記の一例〈Le Christ lui-même est descendu et m'a prise（キリスト御自身が降り、わたしを捕えた〉という文章がヴェーユに書き入れられるだけか、続く段落（第三段落目）のなかに、上記した他の例として、彼女は〈Dans cette soudaine emprise du Christ sur moi〉と綴り、筆者がこれを〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉と訳した引用語句を参照にして、かかる「文章」と「引用語句」の各中心を占める〈わたしを捕えた〉と〈わたしを捕える〉がそれぞれ示唆しようことを筆者なりに説明させておかねば、〈わたしたち〉人間は、少なからず筆者はあの〈イデア界〉にどうして参入し得るかの道筋の一をも証明できるとはいえないであろう。つまり筆者の説明や証明なしでは、そこに〈イデア界〉のことは持ち出される必要もなかろうということである。そして以上から問えるは、〈わたしを捕える〉とした、後者の「引用語句」（第三段落目）が〈わたしを捕えた〉という、前者の「文章」（第二段落目）の、たんなる繰返しの内容に捉えて済ませられるか否かを今確認することにある。筆者は後者の「引用語句」を前者の「文章」の「繰返しの内容」にとどまらせるのではない、いやとどまってはならないと指摘せずにおれないのだ。なるほど両訳文を一瞥しただけでは、両者がほぼ同じ「内容」にみえなくもないし、両原文では、前者の「文章」を簡略して綴ったのが後者の「引用語句」の表現になろうかといえるやも知れぬ。だが筆者が訳文や原文のいずれにおいてさえ、この両者は「繰返しの内容」を有するに当たらないと断じた以上、それにはいかなる理由が見出されるか探るにある。思うに、一に、前者は彼女が自ら実際に「霊的体験」を成し遂げたことを表白した「文章」であると。だから前者の「文章」は筆者の主張するところの、彼女に〈イデア界〉への参入を可能にさせ、もって〈イデア界〉で〈神〉や〈神の子〉と出会った現実をさす以外を書きあらわすのではなかったと。一に、この「文章」に比べ、後者の「引用語句」〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉と訳した方でいえるは、これは〈わたしたち〉人間がいまだ「霊的体験」に達していないことを表記させる「引用語句」である、換言すると彼女を含め〈わたしたち〉が各人の「自力」にて、彼女の現実にした「霊的体験」を試さねばならぬことを彼女に喧伝させるごとき「引用語句」になる。まずいうまでもなく、前者の「文章」訳中の、例の〈わたしを捕えた〉における動詞の時制は過去であり、後者の「引用語句」訳中の、上記と比較され得る〈わたしを捕える〉における動詞の時制は現在である。要は訳のうえで、両者は同じような「内容」を「過去」や「現在」の表現で違わせていることにある（前者における〈わたしを捕えた（m'a prise)〉の動詞が複合過去であるはともかく、筆者にすればさらに、後者におけるほぼ同様にみられる訳はその前者に適合させるためではないといわねばならぬであろう。なぜなら後者の語〈emprise〉を〈捕えること〉と訳しておかないかぎり、この語は以下の本文でも

述べるように、その語の前後の各文章から、今かこれからのことかにかかわってこないだけか、上記に触れたことを、つまり〈わたしたち〉人間（の生）が〈イデア界〉への到達にあることを暗示させはしないのだ)。次に、後者でのうち、筆者は〈突然〉を、いかなる前触れも無く、〈キリストがわたしを捕える〉事態を現出させる様子をあらわすとみて、そう訳しおいたが、その〈突然〉とは〈捕える〉とした「現在」をさすに倣って、「今かこれからのことか」に捉えて用いられる語でなければならない（「今かこれからのことか」は以下で既出した他の原文語句やその訳文語句を再度持ち出す際に検討する)。そして、今度は後者の「引用語句」の原文〈Dans cette soudaine emprise du Christ sur moi〉を参照し、そこに訳文〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉を合わせ推し量れども、筆者が気になるは、上記の〈突然〉が訳と違う〈soudain(e)〉という形容詞であり、この形容詞が付加的に用いられているにもかかわらず、訳の通り、形容詞を副詞にみなしおかざるを得なかったことに、かつ動詞のように訳した〈捕える〉が実は〈emprise（支配（力))〉という名詞であったことにある。以上から解釈するに、副詞とみた〈突然〉は名詞〈emprise〉に直接修飾することができず、ここでは動詞にかかるしかないのであれば、筆者は訳出上の〈捕える〉と意訳もした、この動詞不定形の名詞化の〈捕えること〉に置き換えたり、さらに誰が〈わたしを捕える〉かには当然〈キリスト〉が主語となるべく試みたりした次第である。

だが前段での〈突然〉や〈捕えること〉をはじめにしても、その何が〈イデア界〉のことを語る関係にあるとみられるかである。それに答えるには筆者にとって、疾うに掲げおいた、〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉という、後者にみなした「引用語句」(第三段落目）と、ならびにこの前後を飾る文章それぞれとを再び持ち出すことに厭わずに、おのおのを確認しておく必要がある。後者の「引用語句」の前に記された文章とは、〈Je n'avais pas prévu la possibilité... , d'un contact réel, de personne à personne, ici-bas. entre un être humain et Dieu（わたしはこの世界で、人間と神との間での、人格から人格への、現実的接触の…機会を予測しなかった)〉であったし、後者の「引用語句」の後に記された文章とは、〈J'ai seulement senti à travers la souffrance la présence d'un amour analogue à celui qu'on lit dans le sourire d'un visage aimé（わたしはただ苦しみ（不幸）を通して愛する人の顔の微笑に読まれるものに似た愛の気配を感じただけでした)〉であった。そして筆者がこの「第三段落目」と名付けた以降に続く、これも新たな段落としてはじまる、既出の〈Je ne me demandais jamais si Jésus a été ou non une incarnation de Dieu; mais en fait j'étais incapable de penser à lui sans le penser comme Dieu（わたしはイエスが神の受肉（托身）であったかどうかを一度も自問することはなかった。しかし事実はわたしがイエスを神として思惟することなしに、イエスのことを思惟できなかった)〉という文章がそうであった。

筆者が前段に既出の三文章を再度引用したのはこの段落を含め、これも前記していた、〈キリストが突然わたしを捕えることにあって〉という、例の「引用語句」が三文章やその語句のいずれかによって、「引用語句」の時制を、筆者の指摘した、あの第二段落目の最終行に書き込まれる〈Le Christ lui-même est descendu et m'a prise（キリスト御自身が降り、わたしを捕えた)〉とされる「過去」(形）にでなしに、筆者が彼女に〈突然〉とも加筆されるとみたところから、「今かこれからのことか」(なぜこの表記かはのちに証明する）に見定められることを、あるいは「引用語句」中の〈(突然）わたしを捕える〉場すなわち世界を〈この世界〉のこととしてではなく、〈イデア界〉のこととして「暗示させる」ことを明かすためである。そこで筆者が前段にて最初に持ち出した引用文（文章）と三番目の引用文（文章）をそれぞれ書かれた通りのまま読み取っては、筆者ばかりか誰もがヴェーユに語られる〈神〉や〈神の子〉を〈イデア界〉に〈非人格〉として存在させるとみなすことができよう。少なからず筆者にとって「最初の引用文（文章)」が上記したごとくに理解させられるほかないは、〈人格から人格への〉語句が〈人間と神との間での〉たる語句の前提にあって、当然、後者語句の〈人間と神〉における〈人間〉を前者語句の〈人格から〉とされる〈人格（たとえば彼女)〉に、同様に、後者語句の〈神〉を前者語句の〈人格への〉とされる〈人格（イエス)〉に当てはめられるにしても、一方の〈人格〉要は〈人間（彼女)〉が〈この世界〉で他方の〈人格（イエス)〉要は〈神〉との〈現実的接触の…機会〉を得られるのか、いや獲得できないと断じおくことが可能になるからである。つまり〈人間（彼女)〉は〈この世界〉では〈イエス（神)〉との〈現実的接触の…機会〉に立ち会えないとだけでなく、こうした〈機会を予測しなかった〉とさえ振り返らざるを得なくなった。さらに上記した〈非人格〉という語を用いて、誰かが〈この世界〉の〈人間〉に対して、「非人格から非人格への」〈現実的接触〉を否定させてならぬというにしろ、彼女にすれば、〈この世界〉の〈人間〉には〈非人格〉が生来ない、あるいは忘却されているとみえるのだから、かかる〈現実的接触〉は不可能であるといわせるわけである（しかして〈人間〉は〈非人格〉を持ち得「ない」ままの、あるいは「忘却」したままの生で終わってはならないことを彼女から読み取ることになろう)。したがってこの「生」に関して、ここで繰返してでもいわねばならぬは、彼女が〈この世界（自然的世界)〉に立つとみなされども、そこにのみ執着をみせるのでなしに、〈イデア界（あの世界）(超自然的世界)〉に参入し得て、〈神〉や〈神の子〉と〈現実的接触〉を果たすほかないことにある。さすれば上記中の「筆者の指摘した、あの第二段落目の最終行」は筆者には、彼女が〈イデア界〉に住まう〈神の子〉キリストすなわち〈神〉(傍点箇所をこのように表記した理由は後述している）に現に出会ったことを、要は彼女自らにいう〈霊的体験〉を実現させた文章になると受け取る以外にない。〈霊的体験〉はだから、〈この世界〉における体験であり得ず、〈イデア界〉に参入して、「〈神の子〉キリストすなわち〈神〉」に実際接触したことをさすといわねばならなくなるわけで

ある。筆者がこの出会い（接触）の対象を先きの〈神〉や〈神の子〉とではなく、上記の「〈神の子〉キリストすなわち〈神〉」と表記したのは、かの「三番目の引用文（文章）」で、彼女が〈わたしがイエスを神として思惟することなしに、イエスのことを思惟できなかった〉と述べたからである。

前段最後に掲げた引用文中の〈思惟する〉については、疾うにその複数の事項に亘って（なかでも筆者の主張に関する事項にかぎっては再度以下で取り上げる）一見していたし、例の、「最初の引用文（文章）」中にみられる〈予測しなかった〉や「三番目の引用文（文章）」中の〈自問する〉も筆者にはかのデカルトが指摘したと同じく、〈思惟する〉に与する各語に受け取られるからして、各語を取り込んだ、ヴェーユにいう〈思惟する〉は改めて質されねばならぬといえるが、しかしここではそのことよりか、この〈思惟する〉に関し、さらに〈わたしがイエスを神として思惟する〉と書かれたは、こうした表記が〈わたし（彼女）〉をして何を示唆たらしめるかである。それは〈思惟する〉における繰返しの事項を含めども、筆者が以下に思うことにある。たとえば上記した文章はこれにかぎらず、〈わたしたち〉人間の〈能動〉能力〈思惟する〉とその〈受動〉能力〈思惟〉を可能にさせる〈理性（知性）〉（これも能力といわれる）によってもたらされる一方、この〈理性（知性）〉すなわち〈思惟する〉とその〈思惟〉の機能は当時の彼女や今の〈わたしたち〉にあって、〈イエス〉が現に〈この世界〉に生きていたことを認めさせるのではなく、およそ〈わたしたち〉に対する公教育か、〈わたしたち〉の読書や研究によるかして、たんに〈観念（思惟）〉し得た〈イエス〉を自らに描きさせることにある、なおもいえば〈イエス〉を〈イデア〉の模像として捉えさせるにあろうと。しかも〈理性（知性）〉すなわち〈思惟する〉とその〈思惟〉は彼女にとって、〈この世界〉でだけ通用する能力であった。むろん、〈わたしたち〉人間が〈この世界〉に対し、上記にいう能力を作用させ得るにしろ、こうした作用から、〈この世界〉で〈非人格〉を獲得し、その持主になるといい立てることは不可能である。だから彼女も同じく上記した「三番目の引用文（文章）」において、〈キリスト〉に関するといわずに、〈イエス〉に関する、筆者にいうその〈観念（思惟）〉を〈思惟する〉ときに、つまり彼女にいう〈イエス〉を〈思惟する〉ときに、〈わたし（彼女）〉が〈イエスを神として思惟する〉と述べ、〈神〉の語を使えども、筆者が何よりこの〈イエスを神として思惟する〉に対し触れざるを得ないは、当の〈イエス〉が〈この世界〉では〈非人格〉である〈神として〉存在させられるのでなしに、〈わたしたち〉人間と同様、〈人格〉を有するだけの人間としてあらわれていることにある（彼女にとってももとより、〈神〉は〈非人格〉であり、〈イデア界（超自然的世界）〉に住まうからして、〈イデア界〉は〈神（非人格）〉の領域（世界）になるほかないとみられるなかで、〈この世界〉に生きる〈わたしたち〉人間がたとえば筆者に「〈非人格〉を持ち得ない」か〈非人格〉を「「忘却」したまま」であるといわせたにあって、これが本文に掲げた、彼女の〈神として思惟する〉〈イ

エス〉への思い〈思惟〉と比べられるならば、かつ〈イエス〉の十字架上の体験を事実と受け止めるならば、筆者を含む〈わたしたち〉人間の生き方は上記した通りでよいのか、それともどうあるべきかを、彼女にだけでなくとも、今日の〈わたしたち〉人間にも明らかにさせておかねばならぬ課題であろう)。

だが、筆者が前段最後の括弧内に付した事項については追って触れるにしても、ここは同じ前段括弧前の本文で筆者に〈非人格〉や〈人格〉を問わすべく各記述させた内容が、ヴェーユの語る〈非人格〉や〈人格〉に似通っているとみなすならば、彼女にまず、かかる内容をそう表記させ得るは何か、そしてこの表記は何に基づいていたかを今一度振り返ってみるところにあろう。最初に記した「何」は繰返すまでもなく、〈理性(知性)〉能力をさす。上記した通り、彼女が例の、〈非人格〉や〈人格〉と各名付け得る〈思惟する〉ことや、その〈思惟(観念)〉を打ち出すことも〈理性(知性)〉能力を有したおかげであるばかりか、〈イエスを神として思惟する〉と書き加えた〈観念(思惟)〉にあって、〈神〉は〈イデア界〉に住まうと、かつ〈イエス〉を、〈この世界〉では〈人格〉と〈思惟する〉だけでなしに、〈イデア界〉ではそこに〈非人格〉として存在すると〈思惟する〉ことができる〈キリスト〉にふさわしいのだ(なぜかは新たな引用文を用いて後述するが、筆者はすでに、〈イデア界〉では「(神の子)キリスト」が「すなわち〈神〉」であると一見している)と、さらに筆者が以上のことを踏まえ得るからか、彼女は〈この世界〉に対し、〈神〉が不在すると判断するにせよ、その〈判断〉は〈理性(知性)〉の作用によってしか見出されてこないだけか、〈理性(知性)〉は〈イデア界〉や〈この世界〉に関したことにさえ、いわば自由に〈思惟する〉ことができるし、その〈思惟(観念)〉を生み出させ得るといわねばならぬわけである。むろん「判断する」とその「判断」も〈思惟する〉とその〈思惟(観念)〉に与する能力であるとされるほか、これと同様に取り上げられるは、彼女の既出引用文に窺えた〈予測する〉(とその「予測」)や〈自問する〉(とその「自問」)の各否定である。この〈能動〉能力の否定とは、〈わたしはこの世界で、人間と神との間での、人格から人格への、現実的接触の … 機会を予測しなかった〉と〈わたしはイエスが神の受肉(托身)であったかどうかを一度も自問することはなかった〉という各引用文末尾の語に、要は邦訳における動詞に相当するにちがいない。前者の引用文中の〈予測しなかった〉では、この「動詞」がいくつかの語句を従えながら修飾する目的語(〈la possibilité(機会)〉)を受けると、後者の引用文中の〈自問することはなかった〉では、この「動詞」が〈si〉ではじまる間接疑問文(目的節)を受けるとみるし、しかもその目的語あるいは目的節はそれぞれ、〈受動〉能力たる「予測」や「自問」に見立てられる〈思惟(観念)〉になると指摘できるのだから、こうした〈予測しなかった〉や〈自問することはなかった〉はおのおの、「予測」や「自問」の各内容すなわち各〈思惟(観念)〉を否定するところの〈思惟する〉以外のことではないといわねばならぬわけである。そのうえ上記した「動

詞」のなかで、〈自問することはなかった〉に対する目的節〈イエスが神の受肉（托身）であったかどうか（を)〉に語られる〈イエス〉と、ないしは〈キリスト〉と各名付け得る、この点にかぎらせるだけでも、そこには〈理性（知性)〉の能力が作用されると筆者にみえるほか、彼女は〈イエス〉を〈この世界〉に、〈キリスト〉を〈イデア界〉にそれぞれ住まわせる使い分けを〈思惟する〉し、さらに〈この世界〉では、〈イエス〉は彼が〈イデア界〉より「追放」されたと筆者にいわせるがゆえに、〈非人格〉を放棄せざるを得なくなる一方、筆者の知るかぎり、彼女は〈イエス・キリスト〉という表記では、〈思惟する〉ことはなかったと。さすれば〈イエス〉と〈キリスト〉に関する、彼女の〈理性（知性)〉の作用も「自由」であるといわねばならぬであろう。〈理性（知性)〉が「自由」に作用するという一例はまた、彼女に〈わたしはイエスが神の受肉（托身）であったかどうかを一度も自問することはなかった〉と語らせることでもあろう。だが〈自問（思惟）することはなかった〉自体が「自由」か否かを示唆させるのではない。それどころか、〈思惟する〉とその〈思惟〉は人間（彼女）にとって、もとより不可欠な能力であるが、それでも筆者のみるところ、〈わたしたち〉人間が「生きる」うえで最優先させられるべき能力ではあり得なかった。さらに、〈理性（知性)〉の作用が筆者に「自由」であると記されたは人間なかでも当の彼女にあって、かかる作用さえさまざまな現象を生起させる〈この世界〉の現実を踏まえることなしにもたらされはしなかったのだから、こうした「現実」を受け止めては、その一方で言葉による、「現実」の映し出しに発揮される〈思惟する〉とその〈思惟〉で成ると筆者にいわせた〈観念〉と、この「現実」と関係させないだけか、「現実」を無視しては先行的に、それゆえ何にも煩わされないで「自由」に〈思惟する〉とその〈思惟〉を試みて作り出されよう〈観念(idée)〉あるいは理念（idée）や理想（idéal）（の中身）とはおのずから相異すると指摘しておかねばならぬわけである。換言すると筆者がこれまで〈思惟〉にときに括弧して〈思惟（観念)〉と表記してきた、その〈観念〉こそ彼女にとって、上記した、あの「「現実」の映し出し」を可能にさせる能力を条件に生み出される〈観念〉でしかないということである。だが〈観念〉が「現実」とかかわり生じるにしろ、かかわらぬにしろ、かの〈魂（l'âme)〉の一部位たる〈精神（un esprit)〉の能力〈理性（知性)〉を作用させてこの部位に浮かび上がらせる表象にすぎない（あのデカルトにいう、いわゆる《真理の探求》において、〈観念〉の出所は〈精神（l'esprit)〉要は〈脳〉であったが、しかし〈脳は〈物体（物質)〉にほかならないし、デカルトが〈l'esprit peut agir indépendamment du ceveau（精神が脳と無関係に（脳から独立して）働きかけ得る)〉[15]と断じるからして、〈観念〉は〈脳〉の外で生み出されねばならなかった）と、それでも〈理性（知性)〉の作用によって、〈観念〉が打ち出されるには彼女に、筆者にいう「〈この世界〉の現実を踏まえ」て「「現実」の映し出しに発揮される〈思惟する〉とその〈思惟〉」がすでに「現実」から〈魂（une âme)〉に受容されていた、何らかの対象にかかわって、この対象をいかに筋道よ

く組立てせしめられるかを明らかにさせ得る能力なのだと繰返しおく。と同時に、彼女はその際、例の〈知的誠実さ〉の、あるいは〈不可知論〉の各姿勢を保持して臨むほかなかったはもはやいうまでもないだけか、〈理性（知性）〉を主にした、各姿勢は彼女をして言葉を作り出させる〈理性（知性）〉能力の一機能によって、たとえば正統キリスト教の「現実」を描写し受け入れるごとくに書くか、また批判的に記すか、もしくはまさに彼女に述べられたように、〈神の問題を取り上げない〉、要は〈神の問題〉を保留するごとくに論じるかする立場を堅持していた。こうした立場に支えられる、各姿勢は、〈能動〉機能たる〈思惟する〉とその〈受動〉機能たる〈思惟〉をば「自由」にさせずにいなかった。つまり〈理性（知性）〉能力でめざし得る「自由」が自由たるゆえんは彼女にとって、上記した「自由」を措いてほかに見出されはしなかったのだ。そして筆者にみる、〈理性（知性）〉における「自由」については、以下に持ち出す、彼女の引用文が十分に証明してくれよう。すなわち

L'intelligence ne peut jamais pénétrer le mystère, mais elle peut et peut seule rendre compte de la convenance des mots qui l'expriment.(16)

知性は秘儀（奥義）に決して入り込むことができない。しかし知性は、しかも知性だけは秘儀（奥義）をいいあらわす言葉の便宜さで説明することができる。

Le degré de probité intellectuelle... exige que ma pensée soit indifférente à toutes les idées sans exception, y compris par exemple le matérialisme et l'athéisme; également accueillante et également réservée à l'égard de toutes.(17)（傍線箇所は筆者）

より勝れた知的誠実さであるためへのそれは…わたしの思惟がたとえば唯物論や無神論を含んで、例外なしにあらゆる思想に不偏で中立であることを、要はあらゆる思想に対して等しく接受的であり、等しく留保的であることを求める、と。

ヴェーユが〈理性（知性）〉を疾うに述べたごとく作用させては、筆者にいう、この能力における「自由」を得られることに、すなわち彼女の依って立つ〈知的誠実さ〉の、同じく〈不可知論〉の各姿勢が保持される「自由」に繋ると、換言すると「自由」を求めることにない〈理性（知性）〉の操作は筆者にすれば、彼女が上記引用文の一つで語る〈あらゆる思想〉（ここに書かれた〈idée〉を〈イデア〉や〈観念〉とせずに、〈思想〉と訳したは〈idée〉が複数形だからである）を打ち出し、それらに学ばずともよい、要は彼女が自ら〈あらゆる思想〉を知るために「博覧強

記」に従うこともないどころか、およそこの引用文中に〈あらゆる思想〉と書き入れ質したり、彼女をばかの各姿勢に向かわせたりはしないといわねばならぬであろう。〈あらゆる思想〉とは筆者が思うに、上記引用文中の〈唯物論（mathérialisme)〉や〈無神論（athéisme)〉に倣うと、度々掲げた〈観念論（idéalisme)〉（またの名を「唯心論（spiritualisme)」)、〈実在論（réalisme)〉、「有神論（théisme)」、「理神論（déisme)〉、「懐疑論（scepticisme)」や「汎神論（panthéisme)」などを含ませて表記されよう。だが筆者のみるところ、彼女はこれらの、いわば〈認識論〉的立場のいずれにも属しはしないのだと、それゆえ彼女がいかなる立場に立つかを明かさねばならぬが、それはすぐにではなく、のちに改めて問うことにすると。

XIV

前節最後の箇所で記したように、ヴェーユ独自といえよう哲学は何かを、筆者がいずれ質さねばならぬと述べたにしても、要は彼女が自らの哲学をいかようにして成り立たせるかを、筆者は後述してみる必要があるというにせよ、それでもこの「いかようにして」が何より明らかにされないかぎり、彼女はすでに一見していた通り、多くの哲学者と同じく、彼女の哲学がたんに〈理性（知性)〉を手助けにさせて成るにすぎない（しかし彼女は机上の哲学者ではなかったし、自らを哲学者とみなしたこともなかった）とばかりか、哲学に語られる中身はおよそ現実とかかわらない、理想（観念）論にとどまるとみられてしまうことになるのだ。だから筆者は「いかようにして」を以下筆者なりに解かずに、彼女に成立しよう哲学が「独自」であるとさえいえなくなるわけである。そこで筆者が「いかようにして」を表記すると思われる、そのいくつかをこれまでの拙論に散見させた諸引用文から取り上げてみる。なぜなら諸引用文のなかにはいまだ筆者に指摘されずにいる語（句）や文章があって、これらが「いかようにして」を説明するのに充当させられるとみなされ得るからである。かつここに関係し、解答を先き送りにしてきた、いままでの問いに対しても、筆者は諸引用文の語（句）や文章を繰返し持ち出そうが、可能なかぎり答えなくてはなるまい。つまり筆者は、既出の諸引用文が彼女独自の哲学形成に「いかようにして」役立つかをもはや不問のままにすることなく、そのためにか、諸引用文のうちから適当する語（句）や文章を拾い出しつつ、そこから筆者なりの答えをみつけなければならぬことにある。その際、筆者がこの一連の拙論で主に参照にしていたといえる、既出の諸引用文は、『キリスト教と農耕生活』（1942 年春)、『ペラン神父への手紙（Ⅳ)』（1942 年 5 月)、《Prologue》（1942 年 7 月）や『プラトンにおける神』（(1940 年 10 月－）1942 年 11 月）と各題された作品によると付記させておく。さすれば筆者が彼女に彼女「自らの哲学をいかようにして成り立たせるか」と問うにあって、この「いかようにして」に対する、筆者なりの答えに欠かせぬ一は、これまで述べ

てきたところから、誰もがその一を推測し得るように、彼女が自ら臨んで試みていた体験にあろう。筆者はその通りであると断じるほかない。筆者にかくいわせる「体験」には、日常的「体験」と〈霊的体験〉が見受けられると読むことができる。かつ「日常的体験」と〈霊的体験〉は相即不離である、つまり前者は後者に繋がる関係にしかない。また前者は「日常的体験」といわせるうえで、〈この世界〉で、後者は〈霊的体験〉とみられるうえで、彼女（人間）の〈魂（l'âme)〉を参入させ得る〈イデア界〉でそれぞれ可能にさせられるのだ。

そこで筆者が「これまで述べてきた」、彼女の諸思想を踏まえながら、「日常的体験」と〈霊的体験〉はそれぞれ何を含意させていたかを、あるいはなぜこの「前者は後者に繋がる」と書き入れさせたかを以下に各まとめることで、その証明に代えてみる。以上に掲げた事項のうち、まずは「日常的体験」について語らねばなるまい。「日常的体験」とは、彼女が一に、〈理性（知性)〉を駆使させ構築したと筆者に思える「彼女独自の哲学」に関する思想の一一（この諸思想を体系づけさせたのが一般にいわれる哲学である）を〈Cahier（ノート)〉などに書き残したり、一に、ときに彼女に生じた、例の、〈頭痛〉や〈朗誦〉さらには彼女自らの〈苦しみ（不幸)〉にや〈この世界〉に生きる人間たちに蔓延した〈苦しみ（不幸)〉にかかわったりすることをさす（筆者が上記本文中の、「日常的体験」（の語）に続く、「一に」（以下）と「一に」（以下）の（各中身との）関係はどうであったかについては、前節で一見したが、本文以下にて再度検討し確認する)。まず〈頭痛〉に関することだが、〈頭痛〉はもとより、彼女にいう〈魂（l'âme)〉（頭部（内）すなわち脳）の箇所を襲う痛みである。この〈頭痛〉のことは、彼女の生涯（の出来事）を記載した、かの「年譜」に、15 歳（1924 年 11 月）頃より「神経性頭痛はじまる」と書かれているし、むろん彼女自身も〈霊的自叙伝〉と記す、あの〈手紙〉（原文では〈14 歳のとき〉とされる）で、〈頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させ〉たと語るからして、事実とみなされるほかなくなるわけである。同じく「年譜」から、筆者は彼女が、21 歳（1930 年冬）のとき「ラグビーからの帰途に、持病の頭痛の最初のはげしい発作に見舞われる」（同年春彼女は学士論文『デカルトにおける科学と知覚』を書く）ことを、さらに前記しておいたように、29 歳（1938 年 3 月下旬）「ソレームの修道院で過ごし、はげしい頭痛のうちにキリストの啓示を受ける」ことを知り得る（「年譜」による、〈頭痛〉の本文で述べた以上の例の掲示はもはや省かざるを得ないが、それでも〈頭痛〉は彼女の死近くまでつきまとっていたとされる)。さりとて上記「年譜」による、〈頭痛〉に関した諸事項の記載以外に、筆者が括弧を加え、そこに学士論文の事項を付け足しおいたはなぜかであり、その筆者なりの理由を先きに示しおかなくてはなるまい。要は〈頭痛〉のいくつかの例を記したなかに、あえて学士論文を添えて書き入れたのは、筆者が筆者自らをして学士論文を彼女「独自の哲学」形成の端緒たらしめているとみなす際、〈頭痛〉はかかる形成の一因子として関係させられると読み解かれねばならなかったからである。だがこの学士論文から、筆者は

「かかる形成の一因子」に充当しよう語を拾い出すにあって、当の〈頭痛〉の語をみつけることができなかったが、それでも〈頭痛〉を推測させるに足る一文に出くわしていたことでは、何はさておき〈頭痛〉をその文章とかかわらせてかまわなくなる。すなわち一文とは既出引用文〈身体構造は妨害される〉であったし、彼女は上記文章中の（代名）動詞〈妨害される〉をときに名詞〈妨害（un obstacle)〉[18]として用いていた（以下で主に語られるはその名詞である)。〈身体構造〉にみられる一は「生きる」証したる、「日常（不断)」の、身体の「動き」(〈運動〉あるいは〈行動〉であった。したがって〈身体構造〉が〈妨害される〉というこの動詞を名詞に見立てる〈妨害〉とは〈身体構造〉に対し、身体の「正常」な「動き」にではなく、いわばその「異常」な「動き」に従われるしかないことを、さらに身体の「異常」な「動き」は「日常（不断)」以上の「動き」(「年譜」によれば「はげしい」との表現になろう）を伴なわせるからして、疾うに語っていた通り、身体にとって「負（マイナス)」を示唆させることをさすと理解されるほかなくなる（身体の「正常」な「動き」は「日常（不断)」にみせる「動き」以外でないために、〈妨害〉を受けないどころか、「負（マイナス）ましてや「正（プラス)」をあらわすにかかわらないことを含意させる。なお身体の「異常」な「動き」が「正（プラス)」を示すとして指摘されてかまわぬは筆者には、身体よりか〈魂（l'âme)〉の一部位〈魂（un âme)〉が〈世界の美〉に接するときであるといい得るし、〈世界の美〉に関してはのちに取り上げると付記するしかない)。すると上記にいう〈妨害〉はなぜ〈頭痛〉を〈妨害〉の一とみなすかが明かされる必要がある。その際筆者は彼女に〈頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させた〉と語らせることを想起せずにおれない。そこで筆者ばかりか、誰しもが上記引用文を一読し、彼女にいわせよう、この〈頭痛〉によって、頭部（脳）に属す〈わずかな能力〉が〈麻痺〉を被ると見て取るならば、〈麻痺〉は〈妨害〉の一をあらわさざるを得なくなろう。このことは筆者にとって、〈麻痺〉が頭部（脳）さえ身体（の一部）とみられるならば、その身体の「正常」な「動き」を〈妨害〉させることを、換言すると〈麻痺〉がその身体の「異常」な「動き」から生じることを、それゆえ〈頭痛〉が、〈頭痛〉と因果をかたちづくる〈麻痺〉がその〈身体構造〉を〈妨害〉したことを意味させるにちがいないのだ。かつ〈頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させた〉と記されたなかの〈わずかな能力〉とは彼女にあって、筆者がすでに取り出し、以下で再度説明しよう能力〈感受性〉を除いた、おそらくは〈理性（知性)〉をはじめとする、意志、感覚による感情、想像や記憶などの諸能力をさし示す。筆者はかかる諸能力の、なかでも〈理性（知性)〉の能力がその〈思惟〉において〈頭痛〉〈麻痺〉や〈妨害〉と各名付ける作用を可能にすることを何度となく述べてきたが、しかしこれに加えてここで確認すべきは、〈頭痛〉〈麻痺〉や〈妨害〉がそれぞれいかなる事態を招こうとも、各事態を能力と見立ててはならないことにある。

筆者が上記した〈感受性〉ついて語るにあって、その想起の一に、〈感覚〉が身体（感覚）諸

器官や内臓（感覚）（諸器官）のいずれかをもって、たとえば色彩をはじめとする、いわゆる〈質〉をもたらすと一般に語られることに比して、あの〈頭痛〉にみられると捉えた〈感受性〉は以上にいう、同じ身体や内臓（感覚）諸器官の一（前記に従えば、この一は身体に見立てられた〈脳〉を示すし、〈脳〉と命名したは当然〈理性（知性）〉の作用によろう）を利用し生じたり、しかしかかる〈感受性〉は〈感覚〉のように、「五感（官）」や内臓の一たる〈神経〉や〈血管〉の〈血液〉のおのおのを通して、〈脳〉に〈質〉的に伝えるのではなく（「伝える」は筆者のみるところ、身体や内臓（感覚）諸器官の一それ自体を後述する「動かす」ことに当てはまると受け取ってはならない）、〈頭痛〉における〈脳〉の〈神経〉や〈血管〉の〈血液〉を各〈量〉的に「動か（運動あるいは行動）」させたりしたことを取り上げおくと。さらに、たとえば「五感（官）」中の視覚により生み出される〈感覚〉が、人間を取り巻く世界から、要は人間を除いた外的対象から（人間の）視覚に受容された色彩などを写し出す働きでもって能力（ここでは視覚たる一身体（器官）だけで成る〈感覚〉をして能力（たらしめる））とさせられたり、こうした色彩などを何らかの〈質〉のままに〈脳〉に伝えさせたりするのに比べて、〈感受性〉はどの身体（器官）をもその都度にとどまらせずに「動かす」「動き」すなわち〈運動（行動）〉やその〈量〉にいい当てられた、これらの一一も〈理性（知性）〉による命名であるほか、「動かす」「動き」すなわち〈運動（行動）〉やその〈量〉はそれ自身、身体（器官）の能力と、とどのつまり〈感受性〉は能力といわせるにちがいなくなると。換言すると〈感受性〉にいう身体（器官）の〈運動（行動）〉やその〈量〉は〈脳〉つまり〈魂（l'âme）〉中の一部位〈精神（un esprit）〉が他の身体（四肢などを「動かす」（要するに他の身体（四肢など）に〈命令する〉）ことによってもたらされるのではなく、〈魂（l'âme）〉も含ませていう身体（器官）自体の〈運動（行動）〉すなわちその〈神経〉の「動き」や〈血管〉の〈血液〉の流れが「日常（不断）」はむろんのこと、「はげしい」ときには激しくゆさぶられるように展開され（この「動き」や「流れ」にあっては「日常（不断）」のそれぞれよりか、何らかの変化が伴われているとみる）、しかもこうした〈感受性〉は最初は一身体（器官）で発生するにせよ、それに終始せず、〈脳〉を含む身体全体に影響すべくかかわらざるを得なくなることを示唆させるのである。

前段までに述べてきたいくつかはまた、次のようにもまとめられよう。そのいくつかのうち、〈運動（行動）〉やその〈量〉と語ったに関しては、ヴェーユが〈運動〉による〈変化というものは質的であり、運動というものは量的である〉と断じることに基づいていた。だから筆者にすれば、ここに書かれた〈運動〉と〈運動〉を表現するに等しい〈量〉は例の〈感受性〉に置換されるといわねばならなくなろうわけである。しかして〈運動〉（の語）に括弧により付加された〈行動〉（の語）とはすでに触れおいた通り、彼女が〈思惟と行動との関係〉を説いた際の〈行動〉（の語）に相当してくる。しかもこの〈思惟と行動との関係〉はこれも指摘していたように、「魂と

身体との関係」といい換えられるだけか、後者の「魂と身体」をば前者の〈思惟と行動〉(の語)にそれぞれ括弧を付して当てはめおくことで同時に含意させられる関係は、〈思惟(魂)〉から〈行動(身体)〉への関係に、ならびに〈行動(身体)〉から〈思惟(魂)〉への関係にあった。しかし「同時に」は上記の、両方の関係がつねにいっしょにではなく、その都度〈思惟(魂)〉か〈行動(身体)〉かのいずれかを先きにした関係が成ることを示唆させる。まず〈思惟(魂)〉から〈行動(身体)〉への関係が成ることにおいて、〈思惟〉に括弧し付した〈魂〉は彼女が〈魂〉全体をあらわす〈l'âme〉であったといえども、〈思惟する〉とその〈思惟〉は〈魂(l'âme)〉中の一部位〈精神(un esprit)〉で可能であるため、ここに適当される〈魂(l'âme)〉は〈思惟〉の機能に関する、かかる部位をさすのではなかった。されど〈思惟〉がこの〈思惟〉から〈行動(身体)〉へと関係するごとくにみえるは〈魂(l'âme)〉中の一部位〈精神(un esprit)〉が「四肢」などに〈命令する〉ことにあった。しからば〈思惟〉以外の能力で、当の〈魂(l'âme)〉から〈行動(身体)〉へと関係する能力がみられたのか。筆者にいわせると、しかりである。それはいわずと知れたこと、〈魂(l'âme)〉を構築する、もうひとつの部位で生じる能力〈感受性〉であった(筆者はこの〈感受性〉を主に問うていた)し、その部位も〈理性(知性)〉で〈魂(une âme)〉と名付けられていた。〈魂(une âme)〉では繰返すが、筆者に主張された〈感受性〉はむろんのこと、この〈感受性〉を基に発展する〈感情〉を、あるいは〈感覚〉や〈感覚〉を基に発展する〈感情〉を各生み出す働きが、すなわちおのおのをもたらす、〈魂(une âme)〉の〈運動(行動)〉がみられるのだ(ただし〈感覚〉や〈感覚〉を基に発展する〈感情〉も〈運動(行動)〉であると上記引用文で語られるにしても、このどちらも〈質〉を基調とする能力に変わりはない)。〈魂(l'âme)〉以前に〈脳〉ともいわれよう〈脳〉全体を身体(器官)の一と見立てたならば、当然その一部である〈魂(une âme)〉の、なかでも〈感受性〉たる〈運動(行動)〉は、たとえば〈精神(un esprit)〉部位での〈思惟〉と比較させて、〈思惟〉がそれ自身の〈運動(行動)〉だけにとどめられるか、はたまた「四肢」などの身体部分に〈命令(運動)〉させるかに終始するのとは異なり、その〈感受性〉をして自らに〈命令する〉などを不可能せしめる能力にさせようばかりか、〈魂(une âme)〉をはじめとしつつ、次第次第に身体全体を「動かす」〈行動〉を取らざるを得なくさせるからして、この「〈魂(l'âme)中の une âme)〉(の〈感受性〉)から〈行動(身体)〉へ」と、とどのつまり〈魂(une âme)〉の〈感受性〉はその〈行動(運動)〉を通して、身体の〈感受性〉とかかわらねばならなくなろう(〈脳〉をも含める身体(器官)の〈運動(行動)〉すなわち〈感受性〉は〈思惟〉しないのだから、〈une âme〉ともされる〈脳〉や内臓までを含む身体(器官)に窺える能力はとりあえず上記にいう〈感覚〉か〈感受性〉かしかないと、しかし〈感覚〉は〈感受性〉のように、身体全体に影響を及ぼすことがないと断じおかねばならぬわけである)。そして〈行動(身体)〉から〈思惟(魂)〉への関係が成ることにおいて、筆者に「〈行

動（身体）〉から」はじめられる関係を築き上げるに無くてならないとみえた、ここに記された〈行動〉すなわち〈運動〉こそ、括弧に付した身体（器官）のそれであり、かかる〈運動（行動）〉自体が能力とされよう〈感受性〉でなければならなかった（〈感受性〉が能力と捉えられるは繰返すが、例の視覚（身体（器官）の一）からの〈感覚〉も能力とみなされるのと同様だからである。なお次回にて、筆者はこの〈感覚〉と〈感受性〉の関係がいかにあるかを明らかにしておかなければならない）し、上記した〈魂（une âme）〉の〈感受性〉がこの〈魂〉単独で生じる場合をだけではなく、ここで指摘もした身体の〈感受性〉によって影響せしめられるなかでもたらされた場合を想起する必要があった。つまりこの身体の〈感受性〉が「〈思惟（魂）〉へ」関係するとみるにあって、筆者が「〈思惟（魂）〉と記した一方の〈魂（l'âme）〉から語ると、身体の〈感受性〉はいわずもがな、その〈魂（l'âme）〉中の一部位〈魂（une âme）〉に直接かかわり、しかもこの部位で〈魂（une âme）〉の〈感受性〉を生み出すことに繋らざるを得なくさせることを、要は他の部位〈精神（un esprit）〉における〈理性（知性）〉に、それゆえ上記した、他方での〈思惟〉に直接繋るのではないことを再度確認しておかねばならなかった。換言すると〈思惟〉は、身体の〈感受性〉を前提に生じる、〈魂（une âme）〉の能力〈感受性〉が〈精神（un esprit）〉に受容されたのちに、〈思惟する〉が作用し産出される能力であろうということであった（〈魂（une âme）〉単独で生み出される〈感受性〉が〈思惟〉と繋る場合も〈思惟〉に受け入れられることを条件にするだけか、こうした〈感受性〉の〈精神（un esprit）〉への受容によっても、「日常（不断）」的〈思惟〉がもたらされくるにちがいない。とどのつまり彼女にとって、〈精神（un esprit）〉における〈思惟〉誕生の礎材には、身体のばかりか、〈魂（une âme）〉の〈感受性〉が欠かせないということである）。しかしながら〈魂（une âme）〉要はこれを〈脳〉に見立てるとともに身体（器官）としていう、その〈運動（行動）〉自体の能力〈感受性〉が「日常（不断）」のそれよりか、さらに「はげし」さを加える（これは〈量〉の〈量〉をも示唆させよう）にあって、彼女はかかる〈感受性〉が「日常（不断）」では〈思惟〉へと繋るはずの、その〈思惟〉を〈逃亡〉させてしまう（〈思惟〉ができない）ことを知らされるのであった。この〈思惟の逃亡〉は筆者に示唆させるまでもなく、彼女に語られ、筆者に今問われている〈頭痛〉の、さらに質されよう〈朗誦〉のときに、また〈苦しみ（不幸）〉に、ならびに〈世界の美〉に接したときに各生じる現象であり、そのおのおのに対応され得るは果たして、身体単独の〈感受性〉なのか、それとも〈魂（une âme）〉単独の〈感受性〉か、はたまた〈魂（une âme）〉から身体に、あるいは身体から〈魂（une âme）〉に繋るところの各〈感受性〉によるかどうかをいずれ判断せねばならぬことを、かつ筆者がもっとも主張せずにおれない〈感受性〉は上記の「繋る」関係のそれをとりあえず除いて、いずれにあるかといえば、〈魂（une âme）〉の〈感受性〉のこともさりながら、身体の〈感受性〉を主に論じるにあることを付け加えおこう。

註

(1)「ヴェーユ感受性研究③」(「欧米の言語・社会・文化」新潟大学大学院現代社会文化研究紀要)、第 20 号、2014 年 3 月

(2) Simone WEIL《La source grecque》(Gallimard) 中の《Dieu dans PLATON》P.127

(3)《LA BIBLE》キリストは〈Roi des rois et Seigneur des seigneurs (王の王、主の主)〉(APOCALYPSE DE JEAN) (第 19 章 16 P.1053)、〈Tu as mis toutes choses sous ses pieds (万物をその足の下に服従させて下さった)〉(ÉPÎTRE AUX HÉBREUX) (第 2 章 8 P.1015) LES SOCIÉTÉS BIBLIQES. 両訳は前者が「ヨハネ黙示録」(P.406)、後者が「ヘブル人の手紙」(P.344) であり、『聖書』(日本聖書協会) による。なお後者の主語〈Tu〉は当然キリストをさす。

(4) Simone WEIL《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Lettre à Père PERRIN (Autobiographie spirituelle) [Ⅳ]》P.43

(5) Ibid., P.44

(6) Ibid., P.44 (括弧内ならびに傍点 (省略) 部分は筆者)

(7) Ibid., P.44

(8) Ibid., P.44

(9) Ibid., P.44

(10) Ibid., P.44

(11) Ibid., P.45

(12) Ibid., P.45 (一段落目)、P.46 (二段落目)

(13)《LA BIBLE》《ÉPÎTRE DE PAUL AUX ROMAINS》(第 5 章 8, P.954) LES SOCIÉTÉS BIBLIQUES (『聖書』)『ローマ人への手紙』(P.P.238-239) 日本聖書教会 (なお訳中での括弧内は筆者)

(14) Ibid.,《Genèse》(第 1 章 27、P.5)〈Il créa l'homme et la femme (神は男と女を創造した)〉

(15) René DESCARTES《OBJECTIONS ET RÉPONSES CINQUIÈMES》(《ŒUVRES LETTRES》Gallimard) P.484

(16) Simone WEIL《La pesanteur et la grâce》(Plon) P.133

(17) Simone WEIL《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《Lettre Ⅴ》P.65

(18) Simone WEIL《Sur la science》(Gallimard) 中の《Science et perception dans Descartes》P.87 etc. ちなみに本文既出引用文の原文は〈la structure de mon corps... m'empêche.〉であり、上記と同じ頁に記される。